



[講演]

グローバル化を目指す社会における 今後のドイツ語教育の目指す姿： グローバルコンピテンシーおよび キーコンピテンシーの育成のために DaF 教材を活用する

外国語教育研究センター准教授
坂本 真一 氏

○丸山 それでは、続きまして坂本先生、お願いできますでしょうか。

○坂本 立教大学外国語教育研究センターの坂本真一と申します。本日はどうぞよろしく申し上げます。本日の発表タイトルは「グローバル化を目指す社会における今後のドイツ語教育の目指す姿」です。今回、日本語教育センターとの共同による開催となりますけれども、グローバル・コンピテンシーという考え方をきっかけに、将来、本学でのドイツ語教育をどのように展開する可能性があるのか、ということをしりサーチを踏まえて考察してみましたので、この場ではそのことについてご紹介できたらと考えております。【スライド③-1】

それでは最初に、簡単に自己紹介いたします。【スライド③-2】私の専門はドイツ語学、それからドイツ語教育です。ドイツ語を対象に、会話分析や音声教育に興味があり研究を続けております。特に会話の最中に発話のイントネーションが果たす役割について研究しています。ドイツ語教師として仕事を始めたのは、おそらく2014年だったと思いますので、これまで6、7年ぐらいのキャリアを積んできたこととなります。バックグラウンドについて少しお話ししますと、私の場合、教師になるための養成講座をゲーテ・インスティトゥートというところで受けているところが恐らく特殊なのではないかと思っております。この機関はドイツ政府が設立し、世界各国にあるドイツの公的な国際文化機関です。講座を受講し、修了した後は、講師としても在籍してましたので、日本国内にいながらにしてドイツ語で研修を受け、ドイツ語で授業をし、またドイツ語で仕事をするという貴重な経験を積んでおります。そういった意味では、日本国内でドイツ語教員として仕事をしている人たちの中では、少し異質なバックグラウンドを持っているの

ではないかと思えます。【スライド③-3】

さて、本日お話ししたい内容ですが、まず初めに、日本とドイツそれぞれにフォーカスを当てて、ドイツ語教育の置かれている状況について簡単にご報告したいと思っております。特にドイツは長年移民を受け入れている国ですので、その話題は日本語教育センターにとってもまた貴重なものとなるのではないかと考えております。その後は、グローバル・コンピテンシー、そしてキー・コンピテンシーというところから、立教大学ではどのような外国語教育を目指していくべきかという話題を移し、特に外国語教育の現場、つまり教室の中でコンピテンシーの育成を目指すというときに、どのようなところが大事なのかに関する私の意見をお示ししようと考えております。【スライド③-4】

早速ですが、こんにちのドイツ語教育が置かれている状況についてご報告しましょう。【スライド③-5】まず、日本の場合【スライド③-6】、基本的には高等教育や成人教育の一環となるため、「外国語としてのドイツ語」という位置付けになります。この分野のことをドイツ語の略を使って DaF と私たちは呼んでおります。学習開始の時期は高等教育ですから、ほとんどの場合が大学以降になります。大学での第二外国語、つまり、初修外国語として選択するケースがほとんどです。場合によっては、高校からドイツ語の科目を受けられる学校もあります。成人教育としてドイツ語を選択する理由はさまざまで、学部卒業後の正規留学、趣味、あるいは仕事や結婚を理由にドイツ語を学び始めるというケースが多いでしょう。ドイツ語を学べる環境としては、大学では第二外国語として選択できる場合がとて多いんですけども、語学学校のレベルで考えたときには、全国規模で見るとそれほど多くはないかもしれません。

そういった背景を考えると、実は、学習者の方々はすでに学校教育の段階で英語、あるいはその他の外国語を学んだ経験があるうえで、ドイツ語を学ぶことになります。すると、文法や語彙のレベルで英語と似ているところがたくさんありますので、それがメリットにもなればデメリットにもなったりするということが起こります。面白いことに、構文は基本的には英語と似ているのですが、一部、日本語と似ていると感じられるところもあります。その例を挙げると、動詞を後置する、つまりフレーズの最後のほうに置くという構文があるのですが、そういったところに親しみを感じるという方もいます。【スライド③-7】

この「外国語としてのドイツ語」はもともとドイツ国内外でドイツ語を学ぶ学

習者を対象とすることを想定していましたが、後でお話する移民の受け入れが進むにつれて、現在ではドイツ国外でドイツ語を学ぶ学習者を想定する傾向が強まってきた気がします。簡単にいうと、将来、例えばドイツ語圏での滞在する可能性がある学習者を対象とした教育になります。ここで言うドイツ語圏というのは主にドイツ、オーストリア、スイスのことを指します。こんにちの DaF の教育は、CEFR に基づき、言語のコミュニケーション技能を総合的に学ぶことを大事にしています。そのため DaF の教材では、文法や語彙などの言語知識は何かしらのコミュニケーション上のタスクを達成することを目的として身につけられるように設計されています。授業運営においても、手続的知識として言葉を教えるスタイルがメインとなり、実際に使っていくことを通して習得していくというプロセスをとります。

ところが日本の大学におけるドイツ語教育の場合、典型的な例として、文法とコミュニケーションを完全に分けて教えるということがとても多いのです。要は、時間の配分として、文法は文法の時間を、コミュニケーションの時間にはコミュニケーションというふうにきっちり分けて教えるということがとても多いと思います。つまりは、宣言的知識として言葉の規則をしっかり叩き込むという風潮がとても根強いと言えます。その結果、教室運営上も、文法だけ独立してしっかり学ぶのに対して、コミュニケーションの時間はちょっとゆっくりしていて、学習者もすでに知っていることの繰り返しだからそれほど興味もわかず、お遊びで終わってしまうようなところも多く、残念な結果をもたらすケースも多々あります。

【スライド③-8】

それでは、ドイツの場合はどうでしょうか。【スライド③-9】冒頭でもお話ししましたとおり、近年では欧州一の移民受け入れ国となりつつあり、それに伴い「第二外国語としてのドイツ語」という教育分野が台頭しました。もともとドイツは、80年代、90年代には当時の首相の「私たちの国は移民受け入れ国ではありません」というメッセージによって、その風潮が根強くあったのですが、ついにアンゲラ・メルケル首相が2000年のどこかで、「私たちは移民を受け入れる国です」と演説で述べたことから、国としての方向性自体が変わってきたという背景があります。

皆さんも中学校や高校の社会の教科書や授業の中で聞いたことのある言葉だと思いますが、70年代にはガスタルバイター（Gastarbeiter）と呼ばれる、仕

事を目的にトルコからドイツへ労働者としてたくさんのトルコからの移民が入ってきた時代があります。彼らにとってはドイツで仕事をして、母国のトルコに住んでいる家族へ支援をすることが目的でしたが、次第に家族を呼び寄せるということにも繋がっていきました。そんなこんなで 2016 年以降になりますと、ドイツ国内に約 2,000 万人以上の外国籍を持つ居住者がいるようになります。さらには、約 1,800 万人程度が移民の背景を持つというデータもあります。ドイツの総人口が約 8,000 万なので、だいたい 15% から 20% が移民の背景を持つということになります。

そうすると、やはり移民の子どものための教育、とくに言語政策の一環としてドイツ語の教育にも変化が起きました。まず、出自言語の授業のしっかりやるということ。つまり、移民が最も多いトルコを例に考えると、出自言語がトルコ語の子どもたちにはトルコ語をしっかりと学んでもらう環境を整えるという方向の政策が出てきました。けれども、やはり彼らが実際に住んでいるのはドイツなので、次に、ドイツ社会への統合のための講座、つまりドイツの文化や社会全般に関する知識を学ぶための講座、そして当然のことですがドイツ語の講座も整備されるようになりました。【スライド③-10】

そういった流れを踏まえ、この「第二外国語としてのドイツ語」という位置づけが変わってきました。もともとはドイツ国内でドイツ語を学ぶ学習者の中でも、移民や移民の背景をもつ子供たちのことを想定して生まれた分野です。いわゆる二世とか三世とか、家庭内言語はドイツ語ではないけれども、実際にはドイツで生活をしている家庭の「子供たち」にドイツ語を教えていく、ということです。ところが、こんにちでは移民だけでなく難民の方たちも意識するようになり、子供だけではなく大人も対象とする必要に迫られ、結果的に成人教育をも含めたうえでの DaZ の分野が発展してきた印象があります。

こうしてみると DaF と DaZ では対象となる学習者と目的が異なるわけですが、DaF と DaZ の共通点は、当然ですが CEFR に基づくということ。それからコミュニケーション上のタスクを達成する過程で言語を学んでいくように設計されているということが挙げられるかと思います。DaZ 特有の部分としては、やはり形式よりも内容を重視するということでしょう。つまり、文法上の間違いがあったとしても、それがよほどコミュニケーション上の理解を損なわない限りは訂正をしないといった姿勢が、傾向として DaF よりもかなり強く現れます。それ

から、文字よりは音声でのやり取りを重視する傾向もみられ、聞き取りや会話の練習の方により力が入れている印象があります。こういった点では DaF と DaZ には違いがみられます。【スライド③-11】

さて、ドイツの言語政策にも近年いろいろな事情があるわけなのですが、ここから何か学べるところはないか考えてみましょう。出自言語の言語教育というところにちょっと話題を戻しますと、90年代や2000年代ではもともと、彼らが帰還した後に出身国での生活で困らないようにサポートするという目的がありました。つまり帰還することを前提とした政策なのです。ですが、ほとんどの移民や難民の方々の場合、ドイツでの定住を希望しているのが傾向として強いのです。すると、やっぱり移住者がドイツの社会に統合してもらわないと困るということで、ドイツの社会や文化の教育と言語教育をしっかりと、つまりドイツ語もしっかり教えていこうというふうの流れが変わっていきます。

ただ、そうすると、そもそもの（彼らにとっての母語である）出自言語の言語能力がどこまで身につけているのかが、（彼らにとっての外国語となる）ドイツ語の学習に影響を及ぼすのではないかということも言われるようになります。例えば、カミンスが相互依存仮説を唱えています。これによって、出自言語の能力が十分備わっていないまま、ドイツ語の授業ばかり受けなければならないという仕組みに対する批判が生まれました。あるいは、2000年のPISAのとき、ドイツは平均以下という成績結果が出ているのですが、その理由に、移住者の子どもたちのドイツ語力の欠如が各領域での点数が低いことの要因となっているのではないか、という指摘もでした。

こういったさまざまな流れをみて、高橋（2018）は、「近代型国家形成後に初めて経験した多くの移住者の到来に対して、ドイツの言語政策が追いついていない」と指摘しています。また、移住者の子どもたちだけでなく成人も含めて、出自言語ももちろんしっかり学んでほしいし、ドイツ語もしっかり学んでほしいと、いうジレンマがあったわけですね。実は、言語政策の一部に「子どもの言語能力を測る」取り組みもあったのですが、オストハイデ（2018）は、「出自言語よりもドイツ語の言語能力の育成とその評価に偏りすぎている傾向が感じられる」という批判をしています。さて、こういった言語政策の一端をみて、言語能力の育成ばかり目指すのではなく、もっと大事なところがあるんじゃないか、ということへの気づきになるのではないかと私自身は考えています。【スライド

③-12】

この辺のところをリサーチする中で、日本あるいは立教大学のドイツ語教育に何か還元できることはないかと考えてみました。そもそも日本の大学におけるドイツ語教育というのは、多くの移民や難民を抱えるドイツにおけるドイツ語教育とは根本的に目的、環境が異なりますよね。それは当然です。ですがドイツの場合には、出自言語の習得も目指していた。そうではない場合、つまり移民や難民でない場合だとしても、ドイツの学校教育の場合、初等教育後半から高等教育前半の過程で、英語の他に第二外国語、さらには第三外国語を学ぶことができる環境にあるのです。だいたい小6ぐらいで第二外国語を学び始め、高校生ぐらいのときに第三外国語を学びます。つまり、個人の中に複数の言語能力を養うことができる環境が学校教育の中で既に確立しているのです。グローバル化が進む昨今、日本においても、個人に求められるのは、他者との共存のために他者を理解するということだけではなくて、自分自身を絶えず発展させていくという力が必要になってくると私は考えています。そのため、依然として知識を伝達することに偏った教育のままでは通用しなくなっていくのではないのでしょうか。CEFRの発展や台頭にも大きく影響している複言語主義的な考え方というのは、十分に日本の社会教育においても発揮しうるでしょう。【スライド③-13】

さて、ここでもう一度グローバル・コンピテンシー、それから基本キー・コンピテンシーについて少し確認しておきたいと思います。【スライド③-14】この場ではざっとごく簡単に述べさせていただきます。まずこのグローバル・コンピテンシー、OECDのほうに立ち戻りますと「世界レベルの問題や間文化的状況にうまく適応するための知識、スキル、態度、価値の組み合わせを必要とする多元的な構成概念」であると述べられています。例えば「局所的、大局的あるいは文化間における問題を検討する能力」、「他者の視点および世界観を理解し、認める能力」、「文化間を交差するやり取りの中で、オープンでかつ確かに、効果的にかかわっていく能力」、「共同体全体の幸福と持続可能な開発のためにみずから行動していく能力」といったものが、このグローバル・コンピテンシーそれぞれの能力です。【スライド③-15】さらにOECDではキー・コンピテンシーと呼ばれるものも挙げています。まず1つ目に「自律的に活動する能力」です。そして2つ目は「道具を相互作用的に用いる能力」。この道具というのは言語やテクノロジーのことになります。3つ目は「異なる集団の中でかかわり合う能力」。こう

いった能力を、特に CEFR が出来て以来、言語教育を通して個人の中に育成していく必要があるということが考えられています。つまり、言語知識だけではなくて、総合的な人間形成を目指していく必要があるのです。【スライド③-16】

では、教育現場に積極的に導入すべき部分としてどのようなことがあるのかについて、たとえば境（2015）などにあたってみますと、「いまだ根強い知識伝達に傾倒した教育から脱却し、学習者が中心となって学び、発展できる学びの環境を用意」することが大事だと言われています。さらには「集団の中でかかわり合いながら、自らの力で学びを深め、自己成長を促せる力を育成」していくことも、とても大事です。そうして「自己発信」をしていく。そのためにはまず第一歩として「自分自身を知る」ということがとても大事です。そのため「自分の考えを論理的に表現する力の育成」も大事になってきます。特にこの「自己を知る」という部分についてですが、留学経験者がよく体験するエピソードとして、「私は日本のこと何も知らないんだな」ということを、どの国であっても、どの言語を学習していても、よく耳にしたいと思います。そこから自国の日本について認識や意識付けが戻っていくのはとても大事なプロセスだと思いますが、そもそも「外国語の授業＝外の文化や言語ばかりを学ぶ」ということではなくて、いつも対比的に学ぶということも可能なのではないかと考えています。そういった経験や体験を通して、「他者を知る」ということ。「適切にコミュニケーションを図るための異文化間能力を育成」するということに、結果的につながっていくのではないのでしょうか。【スライド③-17】

では、外国語教育の現場でコンピテンシーの育成を目指すためにはどうしたらいいのでしょうか。こういった教育的な問題について考える際、教材分析がとても大事だと思っています。といいますのも、教材分析によって、時代の流れとともに少しずつ移り変わってきている教育的な背景が垣間見えてくるからです。ところが、余談ですが、よく「ドイツで出版された教材は使いにくいね。日本（人）には合わないね」ということを耳にするのですが、そもそもきちんと分析して著者の意図なり使い方なり分かっていないのに、自分の好みで好きだ、嫌いだと言うのはよろしくないのではないだろうか、と思うわけです。まずは、しっかり分析することが大事だというのが私の信念です。【スライド③-18】

さて、ドイツ語圏の DaF 教材の得意とするところには、コミュニケーションに必要な言語能力を育成するために、タスクを中心に据え、言語を機能的な観点

から学ぶことに方向づけつつも、Landeskunde と呼ばれる文化や社会に関する学びがちりばめられた総合的な言語学習となっている点が挙げられます。日本で出版された教材によくみられる著者の「コラム」を通してドイツ語圏の知識を得るようなものではなく、それぞれの章が始めから終わりまで、文化や社会のテーマによる文脈と紐づけられているため、言語を学ぶと同時に言語を使用する背景となる文化や社会を学ぶことができます。また、こんにちでは学習ストラテジーを明示的に意識づけるといことが大事とも考えられているので、それも教材の中にも見ることができます。そして、能力記述文 (can do) によって、そのセクションで何ができるようになるのかということが明示的に示され、それが個人の言語ポートフォリオへ発展していくということが、教材の中で既にしっかりと構成されていることが分析を通すと見えてきます。【スライド③-19】

今回は *Menschen* (ドイツ語で「人々」という意味) という教材を少し紹介したいと考えていますが、基本的にはほとんどの DaF や DaZ の教材はこういった条件を満たしています。例えば、タスクを中心に言語を機能的な観点から学ぶコミュニケーション言語能力の育成という点に関してみてみましょう。この画面で示しているページのセクションでは、学習目標に「過去の出来事について描写する」ということが設定されているのですが、どのようなプロセスでその学びの手順が構成されているのか説明します。ここで学習する文法は「動詞の過去分詞形」と「完了形の作り方」です。【スライド③-20】まず初めに 5A の練習問題では、2 つのメールのテキストが出てきて、学習者にはそれらを読み大まかな内容を捉えることが求められます。大局的な読みができていないかの理解を確認するためには、メールの書き手である登場人物について書かれた内容から正しいものを選択します。次に 5B の練習問題に移ります。ここではメールのテキストをもう一度読み、例に倣って完了形となっている部分 (完了の助動詞と過去分詞形) にマーカーを引いていきます。そしてマーカーを引いた語句を使って、メールの下に用意された表を埋めて完成させます。このプロセスには学習者自身が文法規則を与えられた素材の中から発見していくという目的があります。その後、6 の練習問題では、パントマイムの形式ですが、完了形の文を口頭で作る練習となっています。例えば、パントマイムをしながら「私は先週の金曜日に何をやったのでしょうか」というふうにグループの中で問い立てをします。そのパントマイムをみて、グループのメンバーは「君はこんなことしたの?」という内容の文を口

頭で産出し、「そうだよ」、「違うよ」とゲーム感覚で学びます。こういった活動を通して完了形の文を作るということが身についてきたら、今度は7の練習問題で実際にメールを書くという問題に移ります。ここでは詳細は割愛しますが、この課題はまだ完全に自由な作文ではなく、部分的に書く内容がコントロールされている段階です。【スライド③-21】そして、次のページの8の練習問題ですが、この問題では宿題として行うのがよいのですが、まず1日の出来事についてメモを作成するタスクを与えます。例えば「7時、朝食を食べた」。そういった行為だけのメモを作り、そのメモを使って1日の出来事についての作文をする。作文したテキストはパートナーで交換し、お互いに文法の誤りをチェックするといったタスクとなります。ご覧のとおり、8の練習問題は、自分自身の経験に基づいた内容をドイツ語で表現することになります。このように、セクション全体では、メールを読むところからメールを書いたり、一日の出来事について描写したりなど、実際の生活に基づいた言語活動を設定することによって、完了形や過去分詞形が学べるように設計されています。【スライド③-22】

次に Landeskunde の扱いについても見てみましょう。例えば、ライプツィヒでは Nachtflohmarkt、つまり night flea market という催しがあり、それに関するテキストが教科書の中にあります。この教材は A1 のレベルで、しかも、おそらく立教の時間割で考えると、週2回で進めるならば5月か6月ぐらいにはこのセクションに到達することになるんじゃないでしょうか。そう考えると結構な量の読み物と思われるでしょう。ちなみに、この直前までに学習した項目は、まだ数字のほか基本的な形容詞です。学習者は、これだけの量のテキストを前にしますが、3つの情報の抜き出すことがタスクです。【スライド③-23】まず、Nachtflohmarkt というのが、どの都市で開催されているのかという情報（都市名を探す問題）。それから、そこで売られている品物が新しいものなのかどうか（形容詞 neu 新しい、alt 古いは既習事項）。実際、フリーマーケットですから古いものにはなりませんね。入料金は幾らなのか（数字、値段が直前で習う項目）。問題文には7ユーロと書かれていますが、テキストに実際にそう書かれているかどうかを見つける課題ということです。実際には、ここに2ユーロとありますね。解き方のポイントは、この Eintritt（入場）という単語とセットになった金額を探していくということです。さてここでは、テキスト全てを読み、全てを理解する必要はなく、必要な情報だけにフォーカスを当てて、テキスト内の情報と問

題文の中とで間違っている部分に訂正を加えるというのがタスクです。【スライド③-24】ですが、課題は実はそれだけで終わりません。次のタスクは、クラスの中でフリーマーケットを開催しようという内容です。ただ文化的な情報を知るだけではなく、実際にフリーマーケットを開催するのです。その際、商品情報を自分で書くことによって「短い情報が詰まったテキスト」を作成するというのが目的なのです。そのためには、直前のセクションで扱われていた「物を描写する」といった能力が、ここにきてフルに使われることとなります。つまりこの問題全体は、ある意味では、応用問題という位置付けですね。応用の部分でもまた Landeskunde を取り入れて総合的に言語を学ぶこととなります。【スライド③-25】

次に、学習ストラテジーの意識づけがなされる部分をご紹介します。ここでは、学習ストラテジーをかなり広義に捉えまして、学習者のタイプ、たとえば自分自身が知覚的なタイプの人間なのか、聴覚的か、認知的か、触覚的なのかということ、自分でまず自己認識をしてもらうということになります。その学習者タイプに応じて、今まで自分自身はどのように外国語学習に取り組んできたのか、どんな勉強をしたら自分に合っているのかというのを、この単元を通して学びます。ここの単元では新しい文法事項を学ぶというよりは、こういった話題に使う表現方法、つまり「自分はこうやって勉強するのが得意だ」、「自分は〇〇を学ぶには〇〇が大事だと思う」とか、「私はこうやっていつも勉強しています」というフレーズを口頭で表現できるようになるということが目的になります。つまりこの単元を通して「外国語の学び方について話す」こと、「勉強スタイルについて話す」こと、また「大事なことを伝える」ことができるようになるのですが、そういった意識付けの背景の1つに、学習ストラテジーへの意識づけというのがあります。【スライド③-26】

そして、教材のモジュールの最後には、教科書見開き1ページを使って、そのモジュールを通して何ができるようになったのか。そして、それがどの程度できるようになったのかというのを自分でチェックするページがあります。ここは Selbsteinschätzung、つまり「自己評価」と書かれてあり、Das kann ich、「こういったことが私はできるようになった」ということを、ここのページの作業を経て再認識できるようになります。もちろん各単元でも学習目標は明示的に示されているのですが、モジュールの最後に再度出てくることで、学習者自身へのフ

ードバックにつながるようになっていきます。【スライド③-27】

さて、このように教材分析の作業を通して、ぜひ立教の外国語教育にも取り入れていきたいなと考えているところが、まずは、1つは帰納的な学習スタイルを導入するというところにあります。伝統的には、文法ルールはこうです、次に文法問題、穴埋めでまず練習しましょう、その後、作文してみましょう、といった流れはとても多く、日本ではよく取り入れられていますよね。逆に、教員から説明を受けて教えられるよりも、(文法事項を)自分で見つけていくというところのほうが記憶の定着がいいとよくドイツでは言われているんですけども、そういったスタイルを、できる範囲で取り入れてみたいなと考えています。

そしてプロジェクト型授業。これはわりとレベルが高くないとできないと思われがちなんですけれども、基礎の段階からちょっとずつ積み上げ式でやっていく必要がやはりあると考えています。といいますのも、プロジェクトへの取り組み方、取り組む際に必要なドイツ語の言語表現は、高いレベルになったから急に使いこなせるわけではなく、A1の段階からちょっとずつ学ぶ必要があるからです。そうでないとB1やB2の高いレベルに進んだときに、もっと高度な話題やテーマ、そしてタスクを設定したときに対応できないからです。

さらには、学習者自身が、自分は何ができるようになったのかということの内省的に捉えることを、何かしらの手段をもって、例えば言語ポートフォリオのようなものを導入してみるということは大事かなと考えています。

このように、いろいろなところを変えていくとなると、やはり評価の枠組みを見直す必要も出てきます。せっかくコミュニケーションに必要な言語運用能力の育成めざすのに、言語知識しか問わないテストだと、教えていることと評価していることが一致しないということになりますね。パフォーマンス能力の評価を取り入れ、それからセルフあるいはピアによる評価を活用していくことも手段としてはあるのではないのでしょうか。【スライド③-28】

さて、最後のまとめに入りますけれども【スライド③-29】、まずヨーロッパ内における人々の移動や歴史的な背景が根底にあり、世界平和への願いが込められたCEFRが発展していきましたね。近年では、移民問題を抱える中で試行錯誤してきたドイツの言語政策への反省と、そこから(日本のドイツ語教育が)学べる点についてお話ししました。そのうえで、グローバル・コンピテンシー、それからキー・コンピテンシーの育成という観点から目指される外国語教育の在り方

について教材分析を交えながら私の意見をお示ししました。そのためには、従来の教室活動の中に、積極的にプロジェクト型授業取り入れ、また評価の枠組みを含めた全体的な見直しすることがとても大事でしょう。【スライド③-30】

この構想自体は、実際のところは、そんなに革新的なアイデアではないものの、そもそも教育の現場を変えていくというのは、とても大変なことです。仕組みを変えるだけでは駄目で、そこに関わる人々も変えていかなくてはいけないからです。なので、課題としましては、既存の教員と教育上の考え方や指針、マインドを共有するという。まずは方向性についてしっかり理解し、納得してもらい、「私もそう思う」と賛同を得るといふ点がとても大事です。何か技術的なところで不足する場合には、研修などで補っていけるよう整えることも大事です。

そして、もっと忘れてはいけないのは、学習者側のレディネス（準備性）を整える必要があるということでしょう。日本の英語教育自体も、もちろんかなり変わってきているとは思いますが、まだ、例えば、学習段階の始めから外国語を使って授業を受けるという環境、つまりドイツ語でドイツ語を学ぶといった環境が広まっていないことが多く、学習者が突然その状況を迎えた場合、学習者自身がどうしたらいいのか、彼らの準備性が整っていないままそれを導入するとパニックを起こしてしまうことがあります。では、こういった工夫をもって授業をオーガナイズすると、そういったところを少しサポートできるのでしょうか。このように、授業を展開する上で忘れてはならない点がたくさんあると思います。そのためには、やはりスキルアップとしての教員研修は欠かせないでしょう。【スライド③-31】

長くなりましたけれども、以上が私からの話題提供となります。ご清聴いただきどうもありがとうございました。【スライド③-32、33】

○丸山 坂本先生、どうもありがとうございました。それでは数分、1個か2個ぐらいいかなと思うんですが、ご質問がある方は「手を挙げる」のボタン押してくださいませでしょうか。今のお話はCEFRのお話とか日本語教育もかなり意識して取り組んでいるところですので、これから来る、多くの外国人をお迎えする日本社会というところでは大変勉強になる内容でした。どうもありがとうございます。手を挙げてくださっている方が、パネリストのほうからですね。三島先生、手を挙げてくださっています。お願いできますか。

○三島 次、登壇なんですけど、まとめのところのマインドの共有の部分ですね。

とても感銘じゃないんですけども、共有する気持ちが大い部分がありまして、先生のほうで新しい教え方なんかを別のドイツ語の教員の先生方にお話をされるような機会があったときに、実際どのような反応をされるのかなと思いました。僕は個人的にドイツ語の先生の知り合いというのは坂本先生しかいないので、ドイツ語という枠組みの中での先生方というのは、どういった共通意識というか、大きな文化ですね。教員文化というんでしょうかね。こういうふうに教えるものだというようなステータスですかね。今それが一体どういう状況にあるのかなというのを少し教えていただければなと思います。

○坂本 参加者の中にドイツ語の教員がいるんじゃないかと思うとビクビクするご質問ですね(笑) これは、いろいろですね。ただ、1つ言えるのは、おそらく僕が認識している範囲では、全国的に、つまり立教がとかではなく、なんだかんだいって文法指導を重視しているというところはあるんですね。なので、まずはドイツ語の形式をしっかり理解してもらいたい、それを理解したら自然とドイツ語が使えるようになる、という指針でおそらく授業を組み立てらっしゃる方がとても多いんじゃないかなと思います。ですから、文法指導がたとえば説明型から発見型となったときに、どうしたらいいのか、どういう指導をしたらいいのか分からない、という方々がたくさんいると思うんですね。いわゆる教員のピリーフの問題です。なので、そのマインドの共有と研修が大事ではあるものの、僕自身の考えでは、そういうスタイルの学習を教員自身が体験することが一番いいと思うんです。実は私、アンスティテュ・フランセで、フランス語をA1から習ったことがあって、これは自発的にフランス語をフランス語で学ぶという環境に身を置こうと思ったからなのです。自分は普段ドイツ語を使って授業をしていたとしても、自分で分かる言葉だと学習者の感じ方が分からないのです。なので、もし自分が、直接フランス語だけで授業された中ではどんな感覚を得るのかということを知っておきたいと思ったんですね。自分の場合は確かに個人のステータス上、言語学もやっているし外国語教育もやっているという点では、先生はきつこうという意図があってこういうことを言っているんだらうなどと、かなり客観的に見られるからこそ(言葉が分からなくても)より分かるんですけども、いずれにしても結果的には「知らない言語で授業を受けても、ああ大丈夫だな」という感覚がありました。なので、それをぜひマインドのところ含めて、(ドイツ語で授業をしても)自分たちが危惧しているほど実はそんな大変なことじゃないんだよ、

とぜひ共有したいなどは考えています。今回の発表のコンピテンシーはあくまで学習者目線で話を進めていったんですけれども、教師教育というところまでをも考えますと、教師自身も自己発展していく必要は絶対的にあると思うんですね。なので、例えば新しいメソッドと出会うということ。それ自体、最初はきっと拒否反応があると思うんですけれども、それこそ異文化体験と同じことだと思うので、ぜひそういったところを現場にはマイルドに紹介しつつ、取り入れていてもらいたいなと考えています。答えになっているといいなと思います。

○三島 素晴らしい回答を本当にありがとうございます。

○丸山 あともうお一人ですね。池田先生、お願いいたします。

○池田 だいたい同じようなことなのですけれども、日本語教育の立場から発言をすると、やはり立教大学の中にはいろいろな日本語力の学生がいて、これからもどんどんいろんな日本語力の学生が入ってきたときに、やはり森平先生や坂本先生が担っている立教大学の、いわゆる英語以外の言語の教育を受ける権利というんですかね、そういう機会を増やしてあげてほしいなという思いがあります。なので、いろいろ大変だと思いますが、ぜひとも日本語によらない初習言語の教育については増やしていただけたらと考えてよいのでしょうか。

○坂本 そこは私自身としては積極的にやりたいと思っておりまして、言語は多分問わないと思うんですけれども、例えばドイツ語の界隈では、ドイツ語を使ってドイツ語を教えるというのはドイツ人の役目、要はドイツ語ネイティブしかできないと思っちゃう方は実は多いんですよ。なので、「いやいや、そんなことはないんですよ」と。むしろ外国語、例えば僕自身の考えになりますが、「(ドイツ語でドイツ語を教えるのは) 非ネイティブがやるところに意義がある」と思うんです。最初はきっとハードルが高く感じられるんですけれども、実はネイティブかどうかは関係なく、実際やってみるとそんな大変なことじゃないんだというマインドをしっかりと共有することが多分大事だなと思います。いずれにしても、そういう機会を学生さん達に提供することはとても大事なことだと思うので、ぜひにやっていきたいと考えております。

○池田 ありがとうございます。

○丸山 ありがとうございます。もうひとつお手を挙げてくださってる方がいらっしゃるんですが、ちょっとどなたでしょうか。松本先生、お願いします。お声だけになるかもしれませんが。

○**松本** 外国語教育研究センターのスペイン語の松本と申します。今のご質問2点と少し流れが違うところでご質問させていただきたいんですけども、最初のほうで坂本先生が、DaFとDaZの違いを教えてくださいました。DaZのほうがわりと形式よりも内容重視で、文字よりも音声重視の教育をしているということだったんですけども、このDaZの教育を受けてドイツ語の学習を進めた人が、例えば高等教育に行くとか、そういう場面で何か困難に遭遇することはないのかなという点をお聞きしたいと思いました。逆にDaFのほうでもこのDaZの教育方法というのを取り入れていったらいいんじゃないかなと思う面がある一方で、内容を重視することで読めないものがあるとか、そういう不便さがあるのであれば、機能ばかりに重点を置くというのもちょっと問題なのかなと思ったりしたので、生活に困難な点が出ていないかということをお教えいただければと思います。

○**坂本** ご質問ありがとうございます。今のはとても大事な点で、きつと突っ込まれるんじゃないかとビクビクしていた点でした(笑) 誤解を生ませてしまった書き方だったかもしれませんが、DaZのほうは、確かにそういう傾向あるものの、決して文字教育をしていないわけではないのです。実際、出自国の違いによってはアルファベットの文字教育から始めなくてはいけないケースもあるんですけども、書く教育を一切していないとか、そういうことではなくて、間違いがあったとしてもそれを寛容的に受けとめるという傾向がDaFよりも強いという認識のほうがいいかなと思います。DaFのほうになると、文字でのやり取りも音声でのやり取りもバランスよく習得することが大事になってくるので、エラーに関してのもものすごくシビアに見ていきます。ただ、DaZになると、もう実際の生活や社会の中で即座に対応していかなくちゃいけないというニーズの方が強いので、あまりビシバシ訂正してしまうことで、モチベーションが下がることになってしまったら困るので、間違いに関してはもうとにかく寛容で、とにかく発信する力をしっかり身に付けてもらいたいという傾向が強いということです。そうすると、実際、高等教育に入っていく段階になったときには、結構難しさがある場合もありますね。ただ、彼ら移民や難民の方の場合、例えば子どもを対象とした教育の場合には、プラスアルファでやっている教育なので、実際には学校教育も並行して受けているんですよ。学校教育の中で母語としてのドイツ語の教育と一緒に受け、後半はわりとスピードアップしていくので、結果的にはしっかり

文法能力は身についていくということは言えるかもしれません。

○**松本** ありがとうございます。ぜひ取り入れていかれたらいいですね。よろしくお願いします。

○**任** 先生方、ありがとうございました。坂本先生、ありがとうございました。

【スライド③-1】



**グローバル化を目指す社会における
今後のドイツ語教育の目指す姿**

～グローバルコンピテンシーおよびキーコンピテンシー
の育成のためにDaF教材を活用する～

坂本 真一
(立教大学外国語教育研究センター)

【スライド③-2】



Part I
はじめに

【スライド③-3】

自己紹介

■ 専門分野／研究分野

ドイツ語学
ドイツ語教育

ドイツ語を対象とした
・会話分析／相互行為言語学
・音声教育

会話におけるプロソディ（イントネーションやリズムなど）の機能

■ ドイツ語の「教師」としてのバックグラウンド

教師養成講座： ゲーテ・インスティトゥート（東京）

* ドイツ政府が設立し、世界各国にもおかれた公的な国際文化交流機関

→ 日本国内に居ながらにして、ドイツ語で研修を受け、ドイツ語で授業をし、ドイツ語を使って仕事をする、という貴重な経験を積みました。

【スライド③-4】

今日のお話しの全体像

- I. はじめに
- II. 今日のドイツ語教育の置かれている状況
 - I. 日本：高等教育・成人（生涯）教育としてのDaF（外国語としてのドイツ語教育）
 - II. ドイツ：移民受け入れ国とDaZ（第2言語としてのドイツ語教育）の台頭
- III. グローバル・コンピテンシーとCEFRの背景にあるキー・コンピテンシーの育成
- IV. 外国語教育の現場でコンピテンシーの育成を目指す
- V. おわりに

【スライド③-5】



【スライド③-6】



【スライド③-7】

高等教育・成人（生涯）教育としての DaF（外国語としてのドイツ語）

■ 学習の開始と目的

- ほとんどの場合が大学での第2外国語（初修外国語）として選択
- 留学、趣味、仕事、結婚などさまざまな理由から、大学を卒業した後から学び始める

■ 環境

- 大学では選択できる場合がとてもおおい
- ドイツ語が学べる語学学校は全国レベルでみるとそれほど多くはない

■ 条件

- 学校教育において「英語」あるいはその他の外国語を学んだ経験はある
- （文法や語彙において）英語と似ているところもたくさんある（ので干渉しやすい）
- 構文上、日本語と似ていると感じられるところもあるので、親しみを感じる（人もいる）

【スライド③-8】

高等教育・成人（生涯）教育としての DaF（外国語としてのドイツ語）

■ 外国語としてのドイツ語（従来）ドイツ国内外でドイツ語を学ぶ学習者を想定

- （現在）**ドイツ国外**でドイツ語を学ぶ学習者を想定
- 将来、ドイツ語圏内で旅行や生活する可能性がある学習者を対象とした教育
（ドイツ語圏：おもにドイツ・オーストリア・スイスを指す）
- CEFRに基づき、言語のコミュニケーション技能を総合的かつ統合的に学べるよう設計
- ほとんどの教材で、文法や語彙は何かしらのドイツ語圏の文化的テーマを学ぶ中で、場面や状況に即したコミュニケーション上のタスクを達成することを通して学べるように設計
- **手続きの知識として「ことば」を教えるスタイルが根強い**

■ 日本の大学におけるドイツ語教育

- 文法とコミュニケーションを完全に分けて教えることがとても多い
- **宣言的知識として「ことば」を教える風潮は根強い**

【スライド③-9】



【スライド③-10】

移民受け入れ国への変化から
DaZ (第2言語としてのドイツ語) の台頭

- 移民大国のドイツ
 - 1970年代：ガスト・アルバイター（おもにトルコ）
 - 2016年以降、約1000万人以上の外国籍を持つ居住者
(cf. Bundesamt für Migration und Flüchtlinge 2018)
 - 2016年時点、約1800万人程度が移民の背景をもつ
(cf. Statistisches Bundesamt 2017)
- 移民の子供のための教育（言語政策）の変化
 - 出自言語の授業（Herkunftssprachenunterricht）
 - ドイツ社会への「統合」のための講座（Integrationskurse）
 - ドイツ語講座（Sprachkurse）

【スライド③-11】

移民受け入れ国への変化から DaZ（第2言語としてのドイツ語）の台頭

■ 第2外国語としてのドイツ語（DaZ : Deutsch als Zweitsprache）

- ドイツ国内でドイツ語を学ぶ学習者（今日(はほとんどの場合が移民・難民を意識)
- **すでに**ドイツ語圏内で生活している学習者を対象とした教育

DaFとの共通点

- CEFRに基づき、言語のコミュニケーション技能を総合的かつ統合的に学べるよう設計
- ほとんどの教材で、文法や語彙は何かしらのドイツ語圏の文化的テーマを学ぶ中で、場面や状況に即したコミュニケーション上のタスクを達成することを通して学べるように設計
- **手続きの知識として「ことば」を教えるスタイルが根強い**

DaZ特有

- **形式よりも内容重視（形式的エラーはよほどでない限り訂正しない）**
- **文字より音声を重視（聞き取り、発話）**

【スライド③-12】

ドイツの言語政策から何を学ぶか…？

■ 出自言語の言語教育

- ・ もともとは、帰還した後の出身国での生活にて困らないようにという目的（**帰還を前提**）
- ・ だが、ほとんどの場合はドイツへの定住を希望している

■ 移住者へドイツ社会への「統合」を目指す言語教育と批判・問題点

- ・ Cummins（1979）の相互依存仮説（interdependence hypothesis）に基づき、**出自言語の能力が十分でないまま、ドイツ語の授業ばかり受けなければならない仕組みへの批判**
- ・ 2000年のPISA：
ドイツは平均以下だったが、**移住者の子供たちのドイツ語力の欠如が各領域での点数が低いことの要因となっているという指摘**（cf. Stanat et al. 2000 : 13）
- ・ 「近代型国家形成後に初めて経験した多くの移住者の到来に、ドイツの言語政策が追いついていない」（高橋 2018 : 37）
- ・ 出自言語よりも、ドイツ語の言語能力の育成と評価に偏りすぎている傾向も感じられる（cf. オストハイデ 2018 : 43）

【スライド③-13】

ドイツの言語政策から何を学ぶか…？

- 日本の大学におけるドイツ語教育は、多くの移民や難民を抱えるドイツにおけるドイツ語教育とは根本的に学習目的、環境、ニーズは異なる
- だがドイツの場合、移民・難民の場合は出自言語（L1）の習得を、そうでない場合には、初等教育後半～高等教育前半の過程で、英語のほか第2外国語・第3外国語を学ぶことができ、個人の中に複数の言語能力を養うことができる
- グローバル化が進む昨今、日本においても、個人に求められるのは、他者との共存のために他者の理解のみならず、自己を絶えず発展させていく力であり、以前として知識伝達に偏った教育のままでは通用しない
- CEFRの発展にも大きく寄与した複言語主義的な姿勢は、十分に日本の社会や教育においても発揮しうると考えらえる

【スライド③-14】

Part III

グローバル・コンピテンシーと
CEFRの背景にあるキー・コ
ンピテンシーの育成



【スライド③-15】

グローバル・コンピテンシー

世界レベルの問題や間文化的状況にうまく適用するための知識・スキル・態度・価値の組み合わせを必要とする多元的な構成概念

1. 局所的、大局的あるいは文化間におきる問題を検討する能力
2. 他者の視点および世界観を理解し、認める能力
3. 文化間を交差するやり取りの中で、オープンで適切に、また効果的に関わる能力
4. 共同体全体の幸福と持続可能な開発のために行動する能力

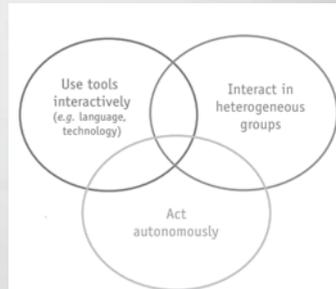


cf. OECDウェブサイト：“PISA 2018 Global Competence”

【スライド③-16】

キー・コンピテンシー

1. 自律的に活動する能力
2. 道具を相互作用的に用いる能力（言語や技術など）
3. 異なる集団の中で関わり合う能力



cf. OECD : The definition and selection of key competencies – executive summary.

【スライド③-17】

日本の（言語）教育現場に積極的に導入すべき部分は…？

- いまだ根強い知識伝達に傾倒した教育から脱却し、学習者が中心となって学び、発展できる学びの環境の用意（学習者中心主義・問題解決型の学習）
- 集団の中で関わり合いながら、自らの力で学びを深め、自己成長を促せる力の育成（自律学習の促進）
- 自己発信のために、まず自己を知り、自身の考えを論理的に表現する力の育成
- 他者を知り、適切にコミュニケーションをはかるための異文化間能力の育成

（境 2015 : 86-87の記述なども参考に）

【スライド③-18】

Part IV

外国語教育の現場でコンピテンシーの育成を目指す



【スライド③-19】

ドイツ語圏のDaFの得意とするところ

1. タスクを中心に、言語を機能的な観点から学ぶコミュニケーション言語能力の育成
2. ランデスタンデ（文化・地誌的なテーマ）を取り入れた総合的な言語学習
3. 学習ストラテジーへの意識付け
4. 能力記述文（「～できる」）の明示的提示による言語ポートフォリオへの発展

★ドイツ語圏で出版されたDaF教材のほとんどは、
これらを満たし、学べるところが多い



cf. Menschen A1.1 Lektion 11 Kursbuch

【スライド③-20】

1. タスクを中心に、言語を機能的な観点から学ぶコミュニケーション言語能力の育成

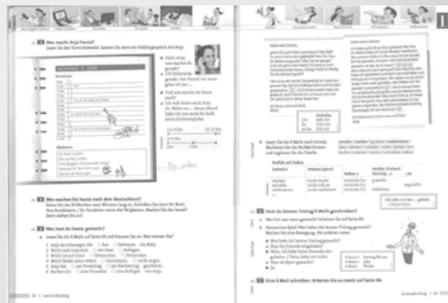
A11レベルの教材

ゴール：

- ・過去の出来事について描写する
（口頭で語る・メールを書く・一日の出来事を語るなど）

学習する文法：

- ・動詞の過去分詞形
- ・完了形の作り方



cf. Menschen A1.1 Lektion 11 Kursbuch

【スライド③-21】

Was hast du heute gemacht?

Lesen Sie die E-Mail auf Seite 63 und kreuzen Sie an. Was meinen Sie?

- Anja ist schwanger. Sie hat bekommt ein Baby.
- Michi und Anja sind ein Paar. Kollegen.
- Michi ist auf einer Dienstreise. Privatreise.
- Michi findet seine Arbeit interessant. nicht so gut.
- Anja hat am Vormittag am Nachmittag gearbeitet.
- Bahare ist eine Freundin eine Kollegin von Anja.

ゴール：過去の出来事について描写する

ステップ

- メールを読みおおまかな内容を捉える
- メールをもう一度読み、完了形をマークし、表を完成させる
* 学習者自身で文法規則を発見する
- ゲーム形式（パントマイム）で完了形の文を口頭で作る練習をする
- メールを書く

The screenshot shows a German textbook page with exercises and a table for verb forms. The exercises include reading an email and identifying actions, and a game where students act out sentences. The table lists verbs in infinitive, past tense, and past participle forms.

Infinitiv	Präteritum (2. Pers. Sg.)	Partizip II	Partizip II (1. Pers. Sg.)	Partizip II (3. Pers. Sg.)
lesen	las	gelesen	gelesen	gelesen
denken	dachte	gedacht	gedacht	gedacht
kaufen	kaufte	gekauft	gekauft	gekauft
arbeiten	arbeitete	gearbeitet	gearbeitet	gearbeitet
schreiben	schrub	geschrieben	geschrieben	geschrieben
telefonieren	telefonierte	telefoniert	telefoniert	telefoniert

cf. Menschen A1.1 Lektion 11 Kursbuch

【スライド③-22】

ゴール：過去の出来事について描写する

ステップ

- 一日の出来事についてメモを作成し、それをもとに一日の出来事について作文する（パートナーで交換し、お互いに訂正する）

The screenshot shows a German textbook page titled 'SCHREIBTRAINING'. It contains a writing exercise where students create notes and write sentences based on them. The exercise includes a list of activities and a section for writing and correcting sentences.

SCHREIBTRAINING

Was haben Sie gestern gemacht?

a Machen Sie Notizen.

Hausaufgaben machen | aufräumen | frühstücken | fernsehen | schlafen | einkaufen | telefonieren | arbeiten | eine Pause machen | Deutsch lernen | lesen | kochen | essen | anrufen | Freunde treffen/feiern | im Internet surfen | Musik hören | Fußball/Tennis ... spielen | singen | malen | fotografieren | tanzen

b Verwenden Sie die Notizen und schreiben Sie Sätze.

Geben Sie Ihrer Partnerin / Ihrem Partner Ihre Sätze. Sie/Er korrigiert Ihren Text (Rechtschreibung/Grammatik).

Ich habe von Gideon Livy geffrhrcht.
Vor einem bis zwlf habe ich gearbeitet. ...

cf. Menschen A1.1 Lektion 11 Kursbuch

【スライド③-23】

2. ランデスクンデ（文化・地誌的なテーマ）を取り入れた総合的な言語学習

A11レベルの教材

ゴール：

- ・ライブツィヒで開催されている“Nachtflohmarkt”という催しについて知る

学習した文法：

- ・数字（値段、時間などの情報を得るため）
- ・基本的な形容詞（ものを描写するため）



【スライド③-24】

2. ランデスクンデ（文化・地誌的なテーマ）を取り入れた総合的な言語学習

A11レベルの教材

ゴール：

- ・ライブツィヒで開催されている“Nachtflohmarkt”について知る

ステップ：

1. 文章を読み情報を得、間違いを探す

■ Lesen Sie den Veranstaltungshinweis und korrigieren Sie die Sätze.

Der Nachtflohmarkt Leipzig

Deutschlands schönster Trödelmarkt bei Nacht
In Leipzig ist der Nachtflohmarkt schon Tradition und ist die Nummer eins in Sachsen. Sie sörbern und handeln gern? Dann sind Sie hier richtig. Von 16.00 Uhr bis 24.00 Uhr kommen 200 Händler und zwischen 2000 und 3000 Besucher zu dem Trödel Event. Hier finden Sie alles aus Oma's Zeiten: Bücher, Taschen, Uhren, Möbel, Kleidung und vieles mehr.

Informationen für Verkäufer: KEINE NEUWARE! Der Aufbau ist: ab 13 Uhr.
Standpreise: 7,- Euro pro Meter (Tische bitte selbst mitbringen)
Wo? An den Tierklinken 42, 04103 Leipzig, Leipzig Zentrums-Südost
Wann? Sa. 21.05.
Goldfuss für Besucher: 16 bis 24 Uhr
Eintritt: 2,- Euro, Kinder bis 12 Jahre frei

→

- a. Der Nachtflohmarkt ist in Dresden. Leipzig
- b. Die Waren auf dem Flohmarkt sind neu. _____
- c. Der Eintritt kostet 7,- Euro. _____

【スライド③-25】

2. ランデスクンデ（文化・地誌的なテーマ） を取り入れた総合的な言語学習

2.1 Klassenflohmarkt

a Wählen Sie einen Gegenstand und schreiben Sie eine Produktbeschreibung wie im Beispiel. Bringen Sie den Gegenstand und die Beschreibung mit in den Kurs.

SUPER KUGELSCHREIBER!
Sehr praktisch und leicht.
Er schreibt blau und macht keine Fehler.
Er kostet nur 5 Euro!



b Machen Sie einen Flohmarkt im Kurs.

- Hier habe ich einen Kugelschreiber. Er ist sehr praktisch und leicht und er kostet nur 5 Euro.
- ▲ Das ist zu teuer.
- Das ist nicht teuer. Das ist ein Sonderangebot. Der Kugelschreiber macht keine Fehler.
- ▲ Dann sage ich 3 Euro.
- Sagen wir 4 Euro?
- ▲ Na gut, okay!

A11レベルの教材

ゴール：

- ・ライブツィヒで開催される“Nachtflohmarkt”について知る

↓

- ・クラス内でフリーマーケットを開催する

そのために…

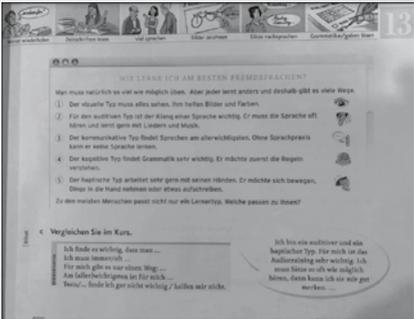
モノを描写する（色、形、値段…etc.）

【スライド③-26】

3. 学習ストラテジーへの意識付け

- ・自分自身の学習者タイプ
- ・視覚的
- ・聴覚的
- ・視聴覚的
- ・認知的
- ・触覚的

- ・外国語学習でどのような方法でこれまで学んできたのかについて振り返る



The screenshot shows a textbook page with the title 'WIE LEBE ICH AM BESTEN FREMSPRACHEN?'. It contains several numbered questions (1-5) about learning foreign languages, such as 'Der visuelle Typ muss alles sehen...' and 'Der auditive Typ findet Grammatik sehr wichtig...'. At the bottom, there is a section 'Vergleichen Sie im Kurs.' with a table for comparing learning preferences.

【スライド③-27】

4. 能力記述文（「～できる」）の 明示的提示から、言語ポートフォリオへの発展

教科書見開き1ページまるまる使って…

・そのモジュールを経て何ができるようになったのか

・それがどの程度できるようになったのかをセルフチェック

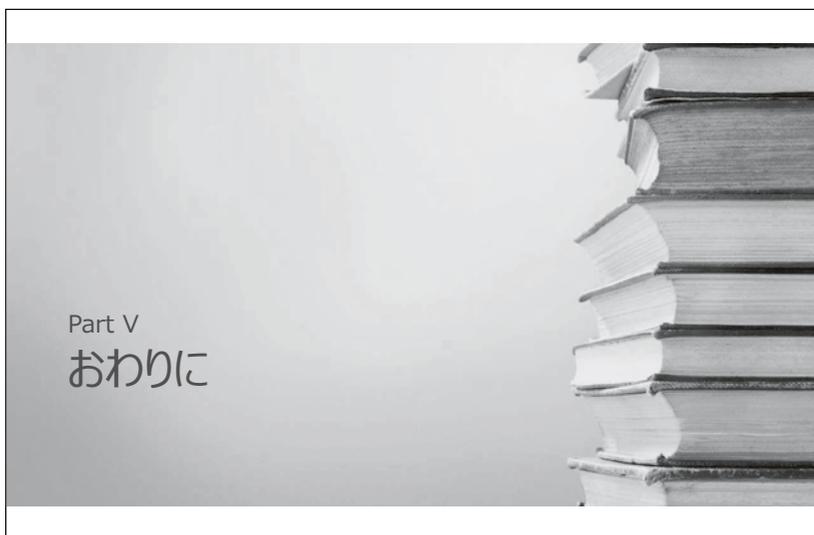


【スライド③-28】

GCやKCの育成を念頭においた 教室内外の活動の在り方と評価の提案

- 帰納的な学習スタイルの導入
- 基礎の段階から「プロジェクト型授業」の展開
- 学習者自身の能力を自ら適宜チェックできる反省する手段の用意
（言語ポートフォリオの導入）
- 評価の枠組みの見直し
（言語のパフォーマンス能力の評価の組み入れ、自己・学習者同士による評価の活用）

【スライド③-29】



【スライド③-30】

まとめ

- ヨーロッパ内における人々の移動を背景に、世界平和の願いがこめられ発展していったCEFR
- 移民問題をかかえるドイツにおける言語政策の反省とそこから学べる点
- グローバルコンピテンシー／キーコンピテンシーの育成を目指す言語教育
(自律学習／学習者中心主義／学びを学ぶ／自己・他者を知り理解する)
- プロジェクト型授業の導入および評価の枠組みの見直し

【スライド③-31】

展望

この構想は必ずしも新しい外国語教育の姿とは言い切れないが…

- 教育の現場を変えていくのはとても大変なこと
- 仕組みのレベルだけではなく、それに関わる人も変えていかなければならない

課題：

- 既存の教員とのマインドの共有／適切な教員の研修
- 学習者の準備性（readiness）を整えたうえでの授業展開

【スライド③-32】

参考文献／ウェブサイト

- Bundesamt für Migration und Flüchtlinge (2018) Das Bundesamt in Zahlen 2018 [https://www.bamf.de/SharedDocs/Anlagen/DE/Statistik/BundesamtinZahlen/bundesamt-in-zahlen-2018.pdf?__blob=publicationFile&v=16]
- OECD ウェブサイト：PISA 2018 Global Competence [https://www.oecd.org/pisa/innovation/global-competence/]
- tence [https://www.oecd.org/pisa/innovation/global-competence/]
- OECD：The definition and selection of key competencies – executive summary. [https://www.oecd.org/pisa/35070367.pdf]
- オストハイダ・テューヤ（2018）『「統合」と「包摂」の狭間で——ドイツNRW州の就学前ドイツ語能力検定制度をめぐって——』ドイツ文学（Neue Beiträge zur Germanistik）』16/2, 42-59.
- 境＝三（2015）『人材育成とドイツ語教育——「コピテンシー」をキーワードに考える——』『外国語－異文化教育における複言語・複文化能力育成に関する研究』（研究課題番号 24242018 平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金 基盤研究（A） 研究成果報告書 研究代表者：境＝三）86-87（http://www.skazumi.com/sakai_kaken_hokoku2015.pdf）
- Statistisches Bundesamt (2017) Bevölkerung und Erwerbstätigkeit Bevölkerung mit Migrationshintergrund – Ergebnisse des Mikrozensus 2017 – [https://www.destatis.de/DE/Themen/Gesellschaft-Umwelt/Bevoelkerung/Migration-Integration/Publikationen/Downloads-Migration/migrationshintergrund-2010220177004.pdf?__blob=publicationFile&v=4]
- Stanat et al. (2000) PISA 2000: overview of the study – design, method and results. Max Planck Institute for Human Development, Berlin.
- 高橋秀彰（2018）『ドイツ移住者の子供へのドイツ語教育と出自言語教育に関する言語政策的考察』『ドイツ文学（Neue Beiträge zur Germanistik）』16/2, 24-41.

【スライド③-33】

ご清聴ありがとうございました。
Vielen Dank für Ihre Aufmerksamkeit!